

BUDŌ

NEWS

今月のニュース

2023 年全日本選抜柔道体重別選手権大会



2023 年

全日本選抜柔道体重別選手権大会

男子
100キロ
級

ウルフアロン (パーク 24)
が 3 度目の優勝

女子
78キロ
超級

富田若春 (コマツ) が 4 連覇



【100キロ級・決勝】ウルフ (奥) が大内刈で勝利する

2023年全日本選抜柔道体重別選手権大会が4月1・2日、福岡市の福岡国際センターで行われた。男子100^キ級は、決勝でウルファロン（パーク24）がグリーンカラニ海斗（日本体育大）から大内刈で技ありを奪って3度目の優勝を果たした。女子78^キ超級は、富田若春（コマツ）と児玉ひかる（SBC湘南美容クリニック）が対戦し、富田が合わせ技一本で4連覇を達成した。

試合は男女各7階級が行われ、各階級には全日本柔道連盟から選拔された8名の選手が出場。トーナメント形式により、国際柔道連盟試合審判規定で行われた。試合時間は4分で時間内に決着がつかない場合はゴールデンスコア（延長戦）により勝敗が決するまで時間無制限で争われた。

男子の部

■60^キ級

決勝は準決勝で永山竜樹（SBC湘南美容クリニック）を降した中村太樹（国士舘大）と、昨年の覇者古賀玄暉（旭化成）に勝利した豎山将（パーク24）の一戦。開始早々に中村が勢いよく小内刈を決めて、試合時間24秒で勝利。中村は初優勝に輝いた。

◎中村太樹（国士舘大）

「初めて日本一になりました。とても嬉しいです。今日は自分らしい柔道を取れました。将来は野村忠宏さんのような柔道家になりたいです」

■66^キ級

決勝は藤阪泰恒（パーク24）と五味佳将（日本エースサポート）の対決。開始早々に藤阪が内股を放ち、崩れかけた五味に小内刈を仕掛けて技ありを奪うと、そのまま袖車絞で一本を決め、2度目の優勝を飾った。

◎藤阪泰恒（パーク24）

「優勝しなければいけないと思ってましたので、勝ちにいくことにこだわりました。決勝でも前に出て行くことを心に決めていました。66^キ級は阿部一二三選手、丸山城志郎選手と同じ階級ですので、今回の優勝でやっと肩を並べられたと思います」

◀ 【60^キ級・決勝】中村（手前）が小内刈を決める



▶ 【66^キ級・決勝】藤阪（奥）が内股を放つ

■ 73キ級

決勝に勝ち上がったのは、石原樹（日本体育大）と吉田優平（自衛隊体育学校）の2人。残り1分で石原が指導2が与えられた直後、石原が勢いよく放った大外刈が技ありとなり、試合はそのまま終了。石原が初優勝を飾った。

◎石原樹（日本体育大）

「（優勝して）信じられないという



【73キ級・決勝】石原（手前）の大外刈

■ 81キ級

気持ちが強いです。決勝はこのままだと負けそうでしたので、思い切っていました。初めて大きな大会で優勝できました。本当に嬉しいです。将来は大野将平選手のような柔道家になりたいです」

老野祐平（帝京平成大）と釘丸将太（パーク24）の決勝。両者とも指導1のまま延長戦に入った。延長1

分過ぎに釘丸が払腰に出たところを老野が小外掛で返した。これが技ありとなって老野が勝利し、初優勝を飾った。

◎老野祐平（帝京平成大）

「決勝は絶対に勝つぞという意気込みで、自分から攻めていって展開を作り、その中で投げにいくのを意識しました。目標はオリンピックで優勝することです。自分はずっと強くなれると思います。ここは通過点で

す。これからもしっかりとやっています。これからです」

■ 90キ級

決勝は昨年準優勝の田嶋剛希（パーク24）と昨年の講道館杯で優勝したベイカー茉秋（日本中央競馬会）の対決。互いに指導1を受けて、延長戦に入る。その30秒過ぎ、田嶋のやぐら投げをベイカーが小外掛で返そうとしたところを田嶋がすかして



【81キ級・決勝】釘丸（右）の払腰の隙を狙う老野

身体を浴びせた。これが技あり（隅落）となって試合は終了。田嶋は悲願の初優勝を勝ち取り、込み上げるものを抑えきれずに目には光るものが輝いた。

◎田嶋剛希（パーク24）

「負けが続いて、柔道をやめようかと思った時もありました。ベイカー選手には今まで1回しか勝ったことがありますませんでした。今回、自分の良さを出し切ることを意識して、そ

こで勝てたのは本当に嬉しいです。勝ち切れたのは自信になりました。見ていて面白い柔道をやり続けま

■100キ級

決勝は東京五輪金メダリストのウルフアロン（パーク24）とウルフに憧れを持つグリーンカラニ海斗（日本体育大）による春日柔道クラブの先輩と後輩の対戦。ウルフが指導

2、グリーンが指導1で延長戦へ突入する。延長戦1分近くにウルフはキレのある大内刈でグリーンをねじり倒して技ありを奪取。ウルフは3度目の優勝を果たした。

◎ウルフアロン（パーク24）

「ここでの優勝が来年のオリンピックに繋がります。復活するぞという意識を持って臨みましたが、体重は順調に落ちていましたが、試合の中で足がつったりとか、うまく調整する

■100キ超級

ことができなかつた場面がありました。そういった中でも最後まで勝ち切ることができたので、また一つ進歩できたのかなと思います」

決勝は22年グランドスラム東京優勝の太田彪雅（旭化成）と中村雄太（東海大）による東海大の同門対決。両者とも指導2を受けて延長戦へと入る。延長2分過ぎに太田が中村の重心が後ろにかかっているところを足技で崩し、そのまま隅落を決めて勝利。初優勝を飾った。

◎太田彪雅（旭化成）

「中村とはいつも東海大で稽古をしています。互いに手の内はわかっていますでしたが、先輩としての意地で負けられない戦いでした。自分の上には斉藤立選手や影浦心選手がいるので、2人に追いつき、追い越したいと思っています」



【90キ級・決勝】田嶋（右）が隅落で勝利した



【100キ超級・決勝】太田（手前）が隅落を決めて勝利



女子の部

■48キ級

決勝は、荒川朋花（ミキハウス）と吉岡光（東海大）が対戦。本戦は両者有効な技が出せず、延長戦に入った。延長4分過ぎ、吉岡の放った投げ技によって吉岡自身の頭が畳に突っ込み（ダイビング）、吉岡の反則負けとなった。荒川が勝利し、初優勝を達成した。

◎荒川朋花（ミキハウス）

「この大会は強い選手が集まるなか、自分は大きな大会での優勝経験がないので、皆さんの胸を借りるつもりで臨みました。練習でやってきたことを出し切ろうと一試合一試合がすごく楽しかったです。同じ学芸大出身の角田夏美選手を見習って強い選手になりたいです」

■52キ級

決勝は、昨年優勝の白石響（環太

平洋大）と昨年の講道館杯優勝の大森生純（JR東日本）の顔合わせ。白石が指導2を受けて延長に入る。

延長2分過ぎに白石が背負投で技ありを奪い、劣勢を挽回して勝利。白石は2連覇を達成した。

◎白石響（環太平洋大）

「選抜では、何としても連覇をしようと思ってきました。達成できて嬉しいです。勝因はチャンスは必ずくると思い、最後まで粘り強く耐えた結果だと思います」

■57キ級

高野綺海（日本エースサポート）と東京五輪銅メダルの芳田司（コマツ）の決勝。延長4分過ぎに吉田が指導3を受けて反則負け。高野が涙の初優勝に輝いた。

◎高野綺海（日本エースサポート）

「私は吉田さんのようなキレのある技もないですが、会場からの応援が力になりました。日本一になりましたが、次はもっと大きな目標に向か



【48キ級・決勝】荒川（左）が攻める



【52キ級・決勝】白石（手前）が背負投で技ありを奪った



【57キ級・決勝】高野（手前）が吉田を崩す

漫画家・別府大学教授
田代しんたろう 著

柔道は、大澤慶己、長谷川博之、腹巻宏一
吉村和郎、山内直人の5氏を掲載！

マンガ・武道のすすめ

大人も子どもも読んで読んで楽しく、ためになる武道教養マンガ。



B5判・236頁

お問い合わせ・ご注文は
日本武道館出版広報課まで
TEL 03-3216-5147



【63^キ級・決勝】立川（上）が10分を超える試合を制して優勝する

つて走り続けたいと思います」

■63^キ級

準決勝で、立川桃（ALSO）と嘉重春樺（ブイ・テクノロジー）が対戦。嘉重が立ったまま肘関節を決める禁止技の協固めを掛け、そのまま腕ひしぎ十字固を決められた立川が「参った」の合図を示し一本負けとなった。しかし試合後、審判団が協議して映像を確認した結果、嘉重の反則を認定し、立川が勝利した。決勝に進出した立川は、土井雅子（JR東日本）と対戦。土井の指導3の反則負けによって立川が10分を超える試合を制し初優勝した。

◎立川桃（ALSO）
「優勝できて本当に嬉しいです。やつとスタートラインに立つことができました。準決勝が終わった時は気持ちひたひたでしたが、（判定が覆り）姉（立川莉奈選手）に『やり切っていい』と励まされ、最後までやり切りました。（姉に続いての選抜優勝で）今まで追ってきた背中だったのでやつと追いついたと思います。これから世界で戦っていける選手になりたいと思います」

▼鯨井甫審判長
「準決勝（立川・嘉重戦）の判定について」「試合後に審判員から反則の指摘があり、ビデオで確認したところ、明

らかに反則行為がありましたので、国際柔道連盟の試合審判規定に基づいて勝者の差し替えを行いました」

70キ級

決勝は22年講道館杯優勝の桑形萌花（三井住友海上）と22年全日本実業団優勝の池絵梨菜（国士舘大柔道クラブ）の対決。互いに決め手を欠くまま、桑形は指導1、池は指導2を受けて延長に入る。桑形が指導2を受けて両者後がなくなった延長5

分半過ぎ、池が場外の指導を受けて反則負け。桑形が念願の初優勝を飾った。

◎桑形萌花（三井住友海上）

「決していい内容ではなかったですが、ここでの優勝を目標としていたので、優勝できてよかったです。池選手とは2戦2敗でしたので、ここは勝ち切ろうと臨みました。決勝は危ない場面も何度ありましたが、気持ちには負けないうにしようと思っていました」



【70キ級・決勝】内股を繰り出そうとする桑形（右）

78キ級

22年グランドスラム東京優勝の高山莉加（三井住友海上）と泉真生（コマツ）の決勝。開始早々に高山が大外刈で技ありを奪うと、そのまま流れるように横四方固に連絡し、合わせ技で一本勝ち。高山は試合時間59秒で4度目の優勝を果たした。

◎高山莉加（三井住友海上）

「選抜では圧倒的に勝って、次に繋げようと戦いました。地元、九州で優勝できて嬉しいです。国内では実績も出てきたかなと思いますが、海外ではまだまだです。これからもっと多くの海外試合に出場したいです」

78キ超級

4連覇がかかる富田若春（コマツ）と昨年の本大会で準優勝に終わった雪辱を果たしたい児玉ひかる（SBC湘南美容クリニック）の決勝。開始1分過ぎ、富田がキレのある小外掛で技ありを奪取。そのまま上四方固で合わせ技一本となり、富田が4連覇を達成した。

【78キ級・決勝】高山（手前）が大外刈から横四方固に移ろうとする



◎富田若春（コマツ）
 「会場の皆さんの声援に背中を押さ
 れました。ありがとうございます。」
 決勝はしっかりと相手を見ながら試
 合を運べたと思います。世界一を目
 指して頑張りたいと思います」



【78^{kg}超級・決勝】富田（左）の小外掛

【大会入賞者】

◆男子	優勝		2位	3位
100 ^{kg} 超級	太田彪雅（旭化成）（初優勝）		中村雄太（東海大）	一色勇輝（日本中央競馬会） 香川大吾（ALSOK）
100 ^{kg} 級	ウルファロン（パーク24）（3回目）		グリーンカラニ海斗（日本体育大）	中野智博（早稲田大） 植岡虎太郎（日本製鉄）
90 ^{kg} 級	田嶋剛希（パーク24）（初優勝）		ペイカー茉秋（日本中央競馬会）	長澤憲大（パーク24） 中西一生（旭化成）
81 ^{kg} 級	老野祐平（帝京平成大）（初優勝）		釘丸将太（パーク24）	天野開斗（東海大） 北條嘉人（日本大）
73 ^{kg} 級	石原 樹（日本体育大）（初優勝）		吉田優平（自衛隊体育学校）	大吉賢（SBC湘南美容クリニック） 原田健士（ALSOK）
66 ^{kg} 級	藤阪泰恒（パーク24）（2回目）		五味佳将（日本エースサポート）	相田勇司（ALSOK） 羽田野啓太（國學院大）
60 ^{kg} 級	中村太樹（国士舘大）（初優勝）		豎山 将（パーク24）	永山竜樹（SBC湘南美容クリニック） 古賀玄暉（旭化成）
◆女子				
78 ^{kg} 超級	富田若春（コマツ）（4連覇）		見玉ひかる（SBC湘南美容クリニック）	高橋瑠璃（SBC湘南美容クリニック） 新井万央（日本体育大）
78 ^{kg} 級	高山莉加（三井住友海上）（4回目）		泉 真生（コマツ）	杉村美寿希（東海大） 梅木真美（ALSOK）
70 ^{kg} 級	桑形萌花（三井住友海上）（初優勝）		池絵梨菜（国士舘大柔道クラブ）	宇野友紀子（JR東日本） 西願寺里保（コマツ）
63 ^{kg} 級	立川 桃（ALSOK）（初優勝）		土井雅子（JR東日本）	山口葵良梨（国士舘大） 嘉重春樺（ブイテクノロジー）
57 ^{kg} 級	高野綺海（日本エースサポート）（初優勝）		芳田 司（コマツ）	出村花恋（ダイサン） 大森朱莉（帝京大）
52 ^{kg} 級	白石 響（環太平洋大）（2連覇）		大森生純（JR東日本）	志々日愛（SBC湘南美容クリニック） 武田亮子（龍谷大）
48 ^{kg} 級	荒川朋花（ミキハウス）（初優勝）		吉岡 光（東海大）	濱野妃菜（淑徳大柔道センター） 林佑美（龍谷大）



会見に臨んだ(右から)佐久本嗣男氏、喜友名諒氏、金城新氏、上村拓也氏、清水由佳氏

喜友名「幸せな選手生活」「人生の宝物」 世界団体形2連覇の盟友・金城、上村と指導者の道へ

空手道・男子団体形チーム(喜友名・金城・上村)現役引退会見

東京オリンピックの空手男子形金メダリストの喜友名諒氏が、団体形ナショナルチームの金城新氏、上村拓也氏とともに3月17日、地元の沖縄で現役引退会見を行った。

喜友名、金城、上村の3氏は2009年に団体形チームを結成以降、世界選手権を2連覇するなど活躍。昨年12月のアジア選手権大会・団体形で6連覇を達成した後、今年1月末に全日本空手道連盟へ引退する旨を届け出て、2月に現役引退を発表していた。会場の沖縄空手会館には地元メディアを中心にテレビカメラ10台が詰めかけた。また、所属道場の劉衛流龍鳳会や県空手道連盟の関係者、親族らも駆けつけ会見を見守った。

スーツ姿で会場に表れた喜友名、金城、上村が登壇。彼らを長年指導してきた佐久本嗣男全空連常任理事と清水由佳同ナショナルチームコーチも同席した。初めに3名が引退についてコメントを述べ、その後、質疑応答が行われた。

■喜友名諒氏

「これまで、幸せな選手生活を送ることができたと思っています。最近、空手を始めた時からのことを思いながら過ごしていました。劉衛流の先生方、先輩方が技を継いできてくれたおかげで、自分も学ぶことができ、それを大会の場で表現し、こうして鍛錬していくことができています。自分もしっかりこの技を継いで、次の世代に繋いでいきたいと思

います」と現在の心境を語った。団体形の仲間、そして連盟、道場、家族、両親への感謝の気持ちを述べた後、「空手界のために、子どもたちに夢や希望をたくさん与えるきっかけを作っていたらと思っています」と今後の抱負を述べた。

最後に「選手生活は充実した時間でした。空手を通して多くの方々と出会い、たくさん経験をしてきました。自分の人生の宝物として、この経験を生かして、皆様の役に立てるように精進していきたいと思います」と締めくくった。

■金城新氏

「小学2年で空手を始めてから今まで、多くの方にご指導とサポートをいただき、競技生活を全うすることができました」「喜友名先輩や上村



会場には多くの報道陣・空手関係者が駆けつけた

■主な戦績

▼男子団体形チーム（沖縄・劉衛流）

- ◎世界空手道選手権大会 2連覇（2016、18年）
- ◎アジア空手道選手権大会 6連覇（15、17、18、19、21、22年）
- ◎KARATE 1プレミアリーグ・シリーズA沖縄大会 4連覇（14～17年）
- ◎KARATE 1プレミアリーグ東京大会 2連覇（18、19年）

▼個人形・喜友名諒氏

- ◎東京2020オリンピック 金メダル（21年）
- ◎世界空手道選手権大会 4連覇（14、16、18、21年）
- ◎KARATE 1プレミアリーグ 優勝19回
- ◎全日本空手道選手権大会 10連覇（12～21年）

▼個人形・金城 新氏

- ◎プレミアリーグ マドリード大会 銅メダル（19年）
- ◎全日本空手道選手権大会 5位（19年）

▼個人形・上村拓也氏

- ◎プレミアリーグ イスタンブール大会 銅メダル（18年）
- ◎全日本空手道選手権大会 5位（17年）

に、感謝してもしきれないです。私一人では見ることができなかった世界の景色を見させてもらって感謝しています」と選手時代を振り返った。

恩師佐久本氏と清水氏への感謝に続け、「佐久本先生は常に私たち3人は兄弟、劉衛流はファミリーだと言われ、皆さんの支えでここまで来ることができました。今後は、受け継いできたバトンを、これから世界を目指す後輩たち、指導する子どもたちに渡していけるように、そして沖縄、日本の空手界に微力ですが力になりたいと思います。また、私自身の空手もさらに深く追究していきたいです」と決意を語った。

■上村拓也氏

「世界一の景色を見ることができたのも、佐久本先生が365日休むことなく稽古をつけてくださったおかげです」「辛いことも、失敗もありまし

たが、空手を通してたくさん学ばせていただきました。劉衛流では『人間の力の向上なくして競技力の向上なし』と掲げています。清水先生には競技以外にも、人として大切なことをご指導いただきました」「家族のように接してくださる先生方、仲間

たちの支えでこれまで頑張ることができました」と感謝の言葉を述べた。

「自分たちが先生の背中を見てきたように、生徒たちが僕たちの背中を見て目標に向かって頑張っています。自分も指導力を上げて、佐久本先生が見せてくれた景色を見せてあげられるよう頑張りたいと思います」と今後の抱負を語った。



3名に続いて、清水コーチは、「彼らにとつてこの10年は、順風満帆に見えますが、辛い時や苦しい時もあったことが思い出されます。さまざまなことがありながらも諦めずに、10年以上、日の丸を背負ってきた本当に頑張り屋です」と健闘を讃えた。そして、「今後、彼らがどういった生きざまを見せるのか。彼らが大きく成長できたらいいなと思います」と期待の言葉を語った。

恩師・佐久本氏は「いよいよこの日がきました。複雑な心境です」と前置きし、喜友名氏たちの活躍を振り返りながら、「世界選手権二つ、アジア大会六つ、それから東京オリンピックも予定通りの圧勝でした。それは、本人たちがしっかりと稽古

して、気を抜かないで一日一日を過ごしてきた成果だと思います」と労い、「これで肩の荷が少しは降りた」と晴れやかな表情を見せた。

引退した3氏はすでにそれぞれの道場で後進の指導に当たっているという。今後について、「選手として世界で経験したことがエキスとなるでしょう。これからコーチとしての第一歩を踏み出します。とても楽しみにしています」と激励した。

質疑応答で、一番印象に残っている大会を問われた喜友名氏は、東京オリンピックではなく、「16年の世界選手権団体形で初優勝した時」と回答。「3人で表彰台上に上った時、目指していたのはこの場所だと思っただ」と振り返った。金城氏、上村氏は14年に地元で開催されたプレミアリーグ沖縄大会を一つに上げ、「決勝で、地元の皆さんと一体となった舞台が印象に残っている」（金城）、「試合を見た道場生が、世界チャンピオンになりたいと今でも夢を語ってくれる」（上村）と思いを語った。最後に、道場関係者、それぞれの家族から大きな花束が贈られ、引退会見を締めくくった。